

市長記者会見記録

日時：2017年 5月16日（火）15時02分～16時14分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：キングスカイフロントに東急REIホテルが出店します（臨海部国際戦略本部）

<内容>

《キングスカイフロントに東急REIホテルが出店します》

司会： それでは、ただいまより市長記者会見を始めます。

本日の議題は、「キングスカイフロントに東急REIホテルが出店します」となっております。それでは、本日本日お越しいただきました皆様方をご紹介します。

株式会社東急ホテルズ代表取締役の小林様でございます。

小林社長： 小林です。よろしくお願いいたします。

司会： 大和ハウス工業株式会社東京本店建築事業部長の竹林様でございます。

竹林部長： 竹林でございます。よろしくお願いいたします。

司会： 入川スタイル&ホールディングス代表取締役社長の入川様でございます。

入川社長： 入川でございます。よろしくお願いいたします。

司会： 昭和電工株式会社川崎事業所総務部長、荒川様でございます。

荒川部長： 荒川でございます。よろしくお願いいたします。

司会： それでは、福田市長より概要についてご説明をさせていただきます。

市長、よろしくお願いいたします。

市長： それでは、キングスカイフロントへの東急REIホテルの出店についてご説明をさせていただきます。

お手元に資料を用意しておりますけれども、キングスカイフロントにおけるホテル計画については、株式会社東急ホテルズ様が運営会社として決定しておりました。このたび施設概要などが決まりましたので、改めて公表させていただきたいと思っております。

キングスカイフロントでは企業誘致が進み、平成28年度には概成を迎え、現在50の企業、機関の進出が決定しております。平成29年度には多くの研究機関が運営を開始する予定と聞いておりまして、今後はこうした研究機関の連携を促し、次々とイノベーションが生まれようとしています。

キングスカイフロント西側のエリアであるA地区は、ライフサイエンスの研究開発拠点として大和ハウス工業株式会社様により開発が進められておりまして、川崎市と

の連携・協力により研究機関の誘致を行ってきております。

このエリアには、キングスカイフロントで働く研究者や従業員、地域の方々の生活利便をサポートする機能の導入も図っており、キングスカイフロントの多くの研究機関から大きな期待を寄せられているのがホテルでございまして、国内外からキングスカイフロントを訪れる方々の滞在場所であると同時に、このエリアの皆さんが集い、交流できる機能が導入されます。

企画プロデュースは、入川スタイル&ホールディングス様により行われ、にぎわいの創出に向けたインバウンド需要の取り込みや進出企業と地域との連動などの取り組みを進めてまいります。

また、このホテルは昭和電工株式会社川崎事業所で作られた使用済みプラスチック由来の低炭素水素を、パイプライン供給により利用する世界初の水素ホテルとなります。

こうした世界最高水準の研究を行う研究者の交流・連携を促す取り組みや最先端の環境配慮の取り組みは、キングスカイフロントのさらなる価値向上を図るものとして考えており、大変期待しているところでございます。

詳細につきましては、株式会社東急ホテルズ様、大和ハウス工業株式会社様、昭和電工株式会社様、入川スタイル&ホールディングス様からそれぞれご説明をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

小林社長： それでは、モニターをごらんいただきながらお聞きいただければと思います。東急ホテルズの小林でございます。東急R E Iホテルの出店についてご説明させていただきます。

1 ページをお願いいたします。昨年12月の着工以来、ホテル等工事は順調に進捗しております。川崎殿町キングスカイフロントは国際戦略拠点として大きな注目と期待を集めるエリアであることに加え、雄大に流れる多摩川越しに東京の空の玄関口である羽田空港を一望できる大変すばらしい魅力的なエリアであります。これまで滞在拠点のなかったこの場所に、来年の春、新たな東急R E Iホテルが誕生いたします。今後も変貌を遂げるキングスカイフロントの中に、どこか昭和的な懐かしさや京浜工業地帯そのままの空気も感じさせる川崎のイメージを踏襲したウェアハウスやプラントを思わせる個性的な建築デザインのホテルであります。メーンターゲットは世界各国からキングスカイフロントを訪れる研究者、技術者の方々、羽田空港を利用する旅行者需要にも大きな期待を寄せております。

3 ページをお願いいたします。このホテルには、特徴的な3つの顔がございます。

全く新しいエアポートホテルであり、居心地のいいライフスタイルホテルであり、世界初の水素ホテルであります。

4 ページで、1 つ目は、豊かな自然に包まれた新しいエアポートホテルとしての顔です。この場所は、羽田空港が目の前と、好アクセスにありながら多摩川の豊かな自然環境が残り、それをすぐそばに感じてお過ごしいただける大変個性的な存在のエアポートです。雄大に流れる多摩川の対岸には、東京オリンピックを契機に開業して30年以上にわたりエアポートホテルとして多くの皆様に愛されました羽田東急ホテルがございました。二度目の東京オリンピック開催を前に、再びここにホテルを開業できることについて、私ども東急ホテルとしては、何か特別な縁や思いを感じるところでございます。

次に、「居心地の良さにつつまれた ライフスタイルホテル」としての顔です。ご滞在中、リバーサイドアクティビティや大きなお風呂でリフレッシュ、カフェでの読書など、思い思いのライフスタイルで自分らしくお過ごしいただくためのさまざまな機能が備わるホテルです。開放的なテラスやにぎやかなバーを備えた最上階のレストランでは、離発着する飛行機を間近に眺めながら、カジュアルな雰囲気でも地域の皆様やご滞在のお客様に交流を楽しんでいただける充実の時間と空間をご提供いたします。

最後に、地球へのやさしさに包まれる世界初の水素ホテルとしての顔です。川崎臨海部でつくられた使用済みプラスチック由来の低炭素水素を導入し、大型燃料電池によりエネルギーを利用する世界初の水素ホテルであります。私どものホテルを舞台に世界初の取り組みに参画し、皆様に注目していただけるのは大変光栄でございます。

以上、3つの顔を持ったこのホテルは、当社が2015年4月に行ったブランド再編後、東急REIホテルとして首都圏初の出店となります。東急ホテルズとして世界標準を強く意識した、これまで日本にはなかった新しいホテルづくりに挑戦し、ホテルのみならず、当該地区の活性化や価値向上に貢献してまいります。ブランド名であるREIに込めましたRelax、Enjoy、Impressive、これを最大限に表現する新たな東急REIホテルの誕生にぜひご期待ください。

私からの説明は以上でございます。

竹林部長： 続きまして、大和ハウス工業の竹林でございます。キングスカイフロントA地区の開発等についてご説明をさせていただきます。

今回、東急ホテルズ様にご出店される区画は1万4,500坪の区画でございまして、ここに5棟の研究施設、そしてホテルを1棟という形で計画を進めてきております。

画面上の奥に見えるのが殿町第二公園でございます。こちらは川崎市様の公園でござ

ございますが、境界とのフェンスを取り払って、ここのエリアとしてはオープンイノベーションを体現する、そういった一体開発を行わせていただいているところでございます。今回、研究施設としては、今年の6月から8月にかけて1棟が竣工いたします。既に慶応大学様、外資系の研究機関様がこちらにテナント様としてご出店されることが決定をしております。

ホテルに関しましては次のページでございます。現在、このホテルで使われる電気は1万1,520キロワットカロリー、ガスが3万2,430キロカロリーでございます。こちらをこの水素の供給によって、約30%が水素をもととしたエネルギー源で賄う形で考えておるところでございます。こちらは電気発電とお湯が生まれるわけですが、お湯をガスという形で熱量換算をすると約30%という形で推定をしておりますので、これの実証実験を一緒に行っていきたいというふうに考えているところでございます。

入川社長： 入川スタイル&ホールディングスの入川でございます。私は、全体の企画及びこの場所のインバウンドの需要、にぎわいの創出という形での企画をさせていただきます。

モニターのほうに1枚目が出ていますが、この地はライフサイエンス企業の集積地であり、殿町キングスカイフロント、羽田空港直近という利便さから今後大きく発展する見込みがある場所でございます。その中で豊かな河川敷に面した立地を生かし、リバーサイドアクティビティを隣接した公園とともに、殿町エリア全体、ひいては広く川崎の町全体を活性化することに寄与したいなというところから始めたプランでございます。

全体の建物のイメージなんですが、東急ホテルズの社長からあったように、最初からウェアハウスというコンセプトがキーワードとしてあったわけなんですが、実際、そこに昔からあったような、川崎のイメージを踏襲できるような建物のイメージでいきたいなというところで、大きくは全体をプラントみたいなイメージでやりたいなと。その中で、羽田空港からきちっとアピールできるような形で、グラフィカルなデザインをしていきたい。これは、窓の内側にあるカーテンの色でございます。こういう形で見せることによって、プラントであるんですが、色鮮やかな形で表現したいなというふうに思っています。

次のページです。これが川側から見たと、本当に川に映えるような形で立地をしている場所でございます。

次が、実際にまだ建ててないもので、イメージの写真がここにございます。こうい

うイメージで見えていければいいかなと。建物自体の形状であるとか、そういうことよりも、どちらかというとグラフィックな処理をして大きく表現していきたいなど、そんなふうに思っております。

内装のイメージでございます。これはどちらかというと、ウェアハウスというよりもプラントに近い。工場の中でも、例えばオーガニックな、ビニールハウスの中に近いような、今あるものを利用したような形で、非常に華美な装飾ではなくて、コンクリートであるとか、木であるとかという素材を利用したようなイメージでいきたいなというふうに考えています。

次のページがホテルのファンクションという形で、これが一番大事なんですけど、一番大きなコンテンツとして、多摩川の河川敷を豊かにしていこうということと、将来かかる橋の先にある羽田空港の一番大事なライフサイエンス企業様への事業者の方に、非常に豊かなライフスタイルを提供できるようなホテルになるのではないかなというところがベースでございます。地域との連動、川崎市様の公園との一体利用、宿泊企業さんへのカンファレンスの需要であるとか、宿泊者のケアであるとか、そういったことも含めて、この川崎の河川敷を利用した形で豊かな宿泊の時間を生かしていきたいなというふうに思っています。

その中のにぎわいの創出の一番大事な考え方なんですけど、実際にインバウンドで、今いろいろな海外の方が日本に来られるんですけど、この中の内容で一番僕らが大切にしたいのは、ビジットからエクスペリエンスという形で、見るだけの日本ではなくて、豊かな河川敷を使って自転車であるとか、いろんなアクティビティが体験できながら宿泊できるような場所があればいいなというところで、中のコンテンツでございますが、ランニング、サイクルステーションであるとか、バイシクルのプロショップであるとか、ファーマーズマーケット。エリアが非常に広く、オープンな環境でして、こういうことを自分たちがやっている中でファーマーズマーケットもやっていきたいな。それから、地元の人、地元のライフサイエンス企業の方のワークショップ、そういったものを開いて、地元の企業さんと地元の人たちのつながりみたいなものもやっていきたいなというふうに思っております。

それから、コミュニティのハブとしてのカフェみたいなものも中に入れて、コアワークであるとかシェアオフィスであるとか、そういった地元のライフサイエンス企業さんのサポートできるような機能も持っていきたいというふうに思っております。

最後に、このプロジェクトサポート企業として、私どものグループであるダブリューズカンパニーがカフェの運営をしながら、施設のデザインは窪田都市研究所、コミ

コミュニケーションデザインに関してはチェントロという形でサポートをしまいでいます。

ありがとうございます。

荒川部長： 昭和電工の荒川でございます。よろしくお願いします。

私のほうからは、私どもの水素利用の取り組みについて簡単にご説明を差し上げたいと思います。資料は前に出ております1枚ですので、適宜ごらんいただければと思います。

私どもの会社は、もともと創業よりアンモニアを生産しておりまして、2003年にプラスチックリサイクルのプラントというものを導入しております。これはどういったものかと申し上げますと、ご家庭からごみとして排出されるプラスチックをリサイクルいたしまして、水素を取り出します。この水素を使ってアンモニアの原料にするといった事業を行っております。

このプロセスについては、エコマークといたしまして製品につきましても、この製造プロセスについて国内で初めてエコマークの認証をいただいております。

この使用済みのプラスチックですけれども、通常に燃やしてしまうと、当然、二酸化炭素（CO₂）が排出されます。私どものプロセスでは、これを分解、回収をしております。回収することによって、同時にアンモニア製造のために新たに投入するような化石由来の原料を削減するといったことができまして、これによりまして低炭素なプラスチックのリサイクルを行っているということになります。

ちなみに、私どもでは、このプロセスで生産をいたしましたアンモニアをECOANNという名前で販売させていただいております。

今回、東急ホテルズ様のホテルに水素を供給いたしますのは、こちらにいらっしゃいます東急ホテルズ様、大和ハウス様などの皆様のご協力のもとで、環境省の地域連携・低炭素水素技術実証事業の一環として実施をさせていただくものであります。平成27年度（2015年）から5年間の計画ということで、現在実施をさせていただいております。

事業全体としては、この図のとおり、川崎ですとか周辺の神奈川の自治体、その以外の自治体もごございますけれども、回収いたしました使用済みのプラスチックを当社で受け入れまして、リサイクルして水素を製造するというところでございます。これをホテルへ供給しまして、燃料電池で使っていただいて、電気、熱で利用していただくと。そういったことで、この低炭素な水素をつくる、運ぶ、使う、そういったサプライチェーンモデルを構築するというところでございます。

川崎市様とは、2015年に、この低炭素水素社会実現に向けた取り組み、協力をしていこうということで協定書を締結しまして、現在取り組んでいるところでございます。水素のサプライチェーン全体で二酸化炭素排出量を抑制しまして、将来の低炭素水素社会に向けた可能性を探っていく、事業としてやっていこうといったことで取り組んでいるところでございます。

私からの説明は以上でございます。

司会： ありがとうございます。

それでは、ここで写真撮影とさせていただきます。ご起立いただきまして、机の前のほうにお並びをいただきたいと思っております。よろしくお願いをいたします。

それでは、皆様方、撮影をよろしくお願いをいたします。

(写真撮影)

司会： 続きまして、質疑応答に移らせていただきますが、本件につきましては、会見終了後、会見室において記者レクを行わせていただきますので、よろしくお願いをいたします。

なお、市政一般についての質疑につきましては、本件の質疑応答が終了後、改めてお受けをいたします。

進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いをいたします。

幹事社： 市長と小林社長さん、それぞれ1点ずつお伺いしたいと思います。

まず、福田市長におかれましては、今回の事業概要やコンセプトをどのように評価しているかということ、あと、個人的な意見で構わないんですが、特に気に入っているところとか、おもしろいと個人的に注目されているポイントがあれば教えていただきたいということです。

小林社長さんにおかれましては、先ほど、昭和及び川崎らしいというものというふうにおっしゃっていました。なぜこういうコンセプトなりを前に出そうとされたのか、その理由や背景を教えてください。

市長： それでは、私から。ご案内のように、順調にキングスカイフロントでライフサイエンス企業や研究所の立地が進んでおりまして、そこに働いていらっしゃる方たちも増えております。そんな中で、宿泊でありますとか、アメニティの機能というのが、その従業員の皆さん、研究者の皆さんから大変求められておりまして、一刻も早いホテルについての期待というものが大変高いものがございます。ただ単に泊まるということだけではなくて、先ほどの説明にもございましたとおり、研究者同士、あるいは地域の皆さん、それからキングスカイフロントのみならず、臨海部に立地して

いる企業の皆さんがオープンな場所で集い、そして交流する、そういった機能というのが大変重要だというふうに思っていて、海外でもこういった研究所が集積しているところでは、この機能というのは必須であります。そういった意味では、今回の東急ホテルズさんの運営による新しい形というのは、まさに必要なものだし、ずっと求められていたものだし、これからも大変期待ができるところだというふうに理解しています。

今回の最も特徴的なものは、川崎でずっと操業してきておられる昭和電工様がつくっておられるアンモニアを精製する過程で出てくる水素、パイプラインを通してホテルに導入していくということは、世界初の水素ホテルという言い方がありましたけれども、まさに最先端のホテルということで、国内だけではなく世界に大いに発信できる、川崎の南端は世界の最先端だと言ってきたのを、まさに具現化するようなホテルになるというふうに思っています。

個人的には、どういうところが好きかというお話は、入川さんのほうからご説明ありましたけども、研究者の皆さんがここに来てわくわくするような、まさにライフスタイルというふうな、殿町スタイルみたいなものがこの施設で体现できるということ、まだ完成前ですけれども、今からもうわくわくしているところです。

以上です。

小林社長： この土地でなぜそのようなコンセプトということなんですけれども、我々、今後どういうホテルを東急ホテルズは展開したいのかというのが、いろんな歴史の中であるんですけど、その中の1つに、アメリカではスタイルホテルというのがあるんですけども、新しいコンセプトで、簡単に言いますと、ただ機能的に泊まるだけではなくて、滞在を楽しむ。ホテルというのは、集いがあったり、交流があったり、にぎわいがあるという場所なんですけど、最近ホテルは、どちらかという、ただ便利に安く泊まれるというのにいていますが、東急ホテルズとしては、その歴史から、ただ泊まるだけではなくて、集うとか、交流するとか、食事を楽しむとか、一般的に楽しんでいただいて、とにかく泊まるだけではなくて滞在を楽しむ。ただ、滞在を楽しむというのはホテルだけではできなくて、多摩川があって、後ろの工業地帯があって、そして羽田空港があるという、キーワードとしてインバウンドと個性というのがあるんですけど、これからインバウンドというのが1つのキーワードになりますし、個性です。昔、東急インチェーンというのがあったんですけど、どこにも同じスタイルで建てて安心感があったんですけど、もうそれでは個性がなくてつまらなくて、その地域地域、その場所場所に合ったようなホテルをつくと。ということは、

多摩川のここで羽田空港を見ながらの場所というのが、まさに個性的なホテル、地域に合ったホテル、そして入川さんから提案があったウェアハウスというのが、あまりぼろっちくて貧相なものではなくて、それがかえってクールでかっこいい、おしゃれだというようなデザインのもとにやると、本来のホテルの機能である地域と交流できる、滞在が楽しいホテルができるのではないかとということと、もう一つ、東急REIホテルは、実は単独でつくったのが26年前なんです。しばらくつくってなくて、やはり首都圏に東京REIホテル、Relax、Enjoy、Impressiveを表現できるようなホテルをつくりたいなと思っていたのが、まさにここがRelaxして、Enjoyで、Impressiveな形を表現できるいい場所になったなということで、従来の東急ホテルズのホテルとは違った形に挑戦できるということで、深く賛同して、一緒にやってみりました。

記者： 2点、どなたがお答えいただいてもいいんですけども、対岸、羽田空港にも周辺にホテルがあると思うんですが、そのあたり、いかに違いを打ち出していくかとか、どのように対策と言うとあれなんですけど、とっていかれるのか、何かご戦略的なものがあつたら教えていただきたいというのと、あと、今小林さんもおっしゃったように、地域との交流とか宿泊者同士のというようなことを具体的にどんな形でされようとしているのかというのが、もしありましたら、教えてください。

小林社長： まず、羽田空港との違いなんですけれども、私ども、羽田エクセルホテル東急というのがありますけど、今、稼働率95%ぐらいで、毎日満室の状態、シングルでいくと1万5,000円から2万円というような形で、ただ、国際線のところにホテルが3棟ほど増えるというところがあるんですけども、ここはまさにエアポートホテルだけで考えるのではなくて、この殿町の場所で、橋ができると1キロぐらいなんですけど、羽田空港をご利用される方、羽田空港で集まってこられる方の研修とかいろいろありますけど、こっちは自然の中でもっとライフスタイルを楽しめるような形で考えています。向こうはエアポートホテルですから、翌日どこかに行くとか、来たときに泊まるという機能的なホテルなんですけども、こちらはもう少し長期滞在、研修なんかで1週間から1カ月ぐらいいらっしゃる方が、全くあきなくて、毎日楽しめるようなホテルで、料金も1万5,000円とか2万円ではなくて、もう少しリーズナブルで。ただ、1万円以上はするという形。稼働率のほうも、慢性的ではないんですけど、この研究施設に来られる方々、研修される方々もありますし、羽田空港を利用される方もいらっしゃいますし、それから、この後、交流でいろんなアクティビティをされるということで、そういうときに宿泊される方と、もう一つ、意外なんです

けど、二子玉川エクセルホテルであるんですけど、自分へのご褒美ということで、よくお母さんと娘さんが泊まる。とにかく余計な食事をつくらなくてゆっくりと楽しみたいので、あそこに泊まりたいと。二子玉川も106室ぐらいなんですけども、4月の稼働率でいくと93%ぐらいあって、あそこのライズに来る方だけではなくて、あそこに泊まってみたいと。富士山を見ながら、多摩川がずっと流れていて、あそこに川崎があって、横浜があってという、意外とそういう方がいらっしゃるので、相当ターゲットは違ってきて、過ごし方も違ってくる。その交流については入川さんに。

入川社長： どうもすみません、社長、念入りなご説明、ありがとうございます。

実は戦略的な話が2つあるんですけど、1つは河川敷。多摩川というものは、僕は日曜日ごとに遊びに行っているんです。実はライフサイエンス企業と河川敷というのはすごく相性がよくて、例えば自転車、ランニングなんかであの河川敷を走っていると、将来、あの橋ができると自転車で海外出張に行けるような町になったりとか、非常に可能性を感じていまして、その中でライフサイエンス企業さん、地域との交流というのは、やっぱりスポーツだとか健康みたいなものを軸にしたワークショップであるとか、心拍をはかるとか、そういったイベントが地元の人と一緒にできるのではないかなと。第二公園、第三公園を使って盆踊りであるとか、正月の餅つきであるとか、そういったものをやりながら地元の住人とライフサイエンス企業さんとの交流を図っていきたい。ロケーション自体が公園と企業さん、住人さんという形で、非常に近いところにあると。それをつなぎ合わせることができるのが、実は多摩川の河川敷だということで、上からではないんですけど、あの場所を何もなかったときに、その絵が最初にあった。戦略的な話でいうと、研究機関というのはどうしても建屋の中で研究して終わりというところを、もっと地元を開いて、もっと住人と一緒になって何かができることが、次世代のライフサイエンス企業さんの、これはジョンソン・エンド・ジョンソンとかいろいろなところが社会貢献事業をされていますので、それを身近にやっていただける場所になればいいなと、そんなふうに交流は考えています。

以上でございます。ありがとうございます。

記者： ありがとうございます。

記者： 東急ホテルズの小林社長にお伺いしたいんですが、御社のホテルのブランドを幾つかお持ちで、その中でも東急REIホテルは、いわゆるビジネスホテルのブランドだというふうに理解しているんですが、先ほどのお話の中で、ただ泊まるだけで

はなくて滞在を楽しむホテルというコンセプトだというお話だったんですけども、そういうコンセプトの中で東急R E I ホテルというブランドを選ばれた理由は何なのかということをお伺いしたいと思います。

それに関連して、例えばホテルの中に宴会場ですとか、そういったものも設けるご計画があるのかどうかということ。

もう1点、発表資料で、世界初の使用済みプラスチック由来の低炭素水素を利用する水素ホテルという非常に長いキャッチフレーズがついているんですが、先ほど世界初の水素ホテルというお話もあったんですけども、世界初の水素ホテルという単純明快な言い方でもよろしいのかどうか、そこをご確認させてください。

小林社長： まず、ブランドなんですけど、当社には東急ホテルというブランドとエクセルホテルというブランドとR E I ホテル、3つのブランドがあって、かつては5つ、6つあったものを集約しました。原形になっているのは、東急インチェーンというのが1973年ごろからやっているんですけど、それはまさにビジネスホテルで、インということで、ホテルのもう少し旅館的な、東急インということなんですけど、それは余りにもビジネスマンが泊まる場所として貧相だったので、安く快適に安全に泊まれるということで東急インとやったんですけど、地方を中心にやったんですけど、衰退をしてきました。そこで、最近はビジネスホテルだけではなくて、海外のレジャーのお客様も多いので、東急インという言い方をやめて、ホテルだと。つまりホテルにしようということで、このRelax、Enjoy、Impressiveという、東急R E I ホテルという名前で新しくブランドを構成しました。ホテルをつくるのか、エクセルをつくるのか、R E Iをつくるのかというと、このR E Iが最もカジュアルで親しみやすい。R E I ホテルが比較的通常の延長線で、エクセルが非日常への扉ぐらいで、ホテルが非日常というように考えていただくと、まさにこの土地がR E I ホテルにふさわしいと。通常の延長線上でくつろげるということで、このブランドを選びました。ですから、一般的な宴会場はございませんで、カンファレンスルームで30名ぐらいが会議をしたり、そういう場所は設けておりますが、一般的な宴会場のような形では設けておりません。

それから、これが世界初の水素ホテルと呼んでいいかどうかは……。

竹林部長： 大和ハウスのほうから。水素のホテルにおける利活用は、皆さん、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ハウステンボスの「変なホテル」で、2016年の3月ぐらいに東芝さんのH2Oneという機械を使って、太陽光発電による電気を水素で利活用するというふうなことでご発表がありますので、単純に世界初の

水素ホテルというような言葉でまとめてしまうと、ハウステンボスさんのほうが先ですよというふうなことになるかと思います。

ちなみに、ハウステンボスさんは、発表されていらっしゃる数値でいくと、電力で54キロワット、今回の東急さんのホテルの約2分の1の出力量ということでございますので、出力量としてはこっちが大きいと。世界初は何かというと、使用済みプラスチックというところと、オンラインによる水素供給が行われていると。水素に関しては、いわゆる燃料電池車が岩谷産業さん等の水素ステーションで供給されておりますけれども、こちらは圧縮水素を運んできて、そこで貯蔵して燃料電池に供給をする。つまりオンラインではない、オフラインでの供給になります。ですから、オフラインでの供給とオンラインでの供給というのは、当然ながら常時供給ができるのかできないのか、そういったような違いがありますので、そこが今回の特色であるかなということと、循環型社会というふうなことを考えていくと、私どもが排出をしたものがエネルギーに変わると、しかも、それが常時供給をされているというところが、今回大きな特色ではないかなというふうなことで考えております。

記者： 水素が30%のエネルギー量に相当ということで、これによるホテルの光熱費というのは、通常、電気やガスを使った場合と比べてどれぐらい上下するのかというのを、まずお聞かせいただけますでしょうか。

竹林部長： どれぐらい安くなるかですか。

記者： 高くなるのか、安くなるのかわかりませんが。

竹林部長： 今、環境省様の実証実験事業ということでございますので、実証実験が続いている平成31年までは補助が出ると。

記者： 平成31年末までということでしょうか。

竹林部長： 末までです。3月までです。

荒川部長： 平成31年3月までです。

記者： 3月末までは……。

竹林部長： 環境省の実証実験なので、補助が出るので、こちらの水素供給に関しては費用が低減されていると。

記者： それ以降はどうなるんですか。

竹林部長： それ以降は、金額は未定でございます。事業の継続という点に関すると、何も国庫的な補助が出ないのであれば、昭和電工様と水素供給に関して、1立米当たりどのぐらいにされますかというふうな、正直、折衝をしなければいけないというふ

うなことになるります。

記者： その時点でまた宿泊料等の見直しとか、そういったところも考えられるんでしょうか。

竹林部長： 宿泊料の見直し……。

小林社長： 宿泊料には転嫁されないと思いますので。今、仮説に基づく計算では、私ども、当初は3割ぐらいコストは安くなると聞いておりました、その実証実験が終わった後は、もう一度交渉というふうに聞いておりますので、応援をよろしく願います。

記者： あと、東急REIホテルとしては22カ所目でいいんでしょうか。

小林社長： 22個目。

記者： 22カ所目ということで、REIホテルとしてスタートしているというのは、これで何番目になるんでしょうか。

小林社長： スタートからREIは、2つ目ですね。去年の11月に長野の駅前に。

記者： 長野に次いで2つ目。

小林社長： はい。

記者： 200室とありますが、部屋のタイプはどういう、シングルとかツインとか。

小林社長： 約8割ぐらいがシングル。今、シングルといたしても、ベッドの幅が160くらいありますので、週末には十分ダブルとして使える。シングルが8割ぐらいで、あとの2割がツインですね。どうしても研修の方とかいらっしゃいますので、終日はシングルで使って、週末はダブルで使えるような考えでいます。

記者： 運営と施主と書かれていますが、土地とか建物は、どちらの所有になるんでしょうか。

竹林部長： こちらは研究施設とホテルともに、土地は大和ハウスが既に取得をしております。基本的には賃貸という形ですが、今回、建物に関しては芙蓉総合リース様にご所有していただくというふうな形で、私どもは土地を芙蓉総合リース様にお貸しして、芙蓉総合リース様から東急ホテルズ様に賃貸をしていただくと、そのような事業です。

記者： 建物はサブリースのような形になって、土地は大和ハウスさんから東急ホテルズさんにリースするということですね。

竹林部長： はい。

記者： あと、5階建てというのは、何か高度制限がぎりぎりになったとか、そういうことなんんでしょうか。

竹林部長： ここは航空路の下に当たっていますので、20メートル規制がございますので、その高さまでしか建てられないという形になります。

記者： 200室にされたというのは、こういった根拠からなんでしょうか。

小林社長： これは敷地と、それから、まだ橋もできていませんので、大体これぐらいが最も適切サイズであろうということで考えています。

記者： ありがとうございます。

荒川部長： すみません、1点訂正させてください。実証実験の期間です。平成27年度から5年間ですので、平成32年の3月までです。失礼しました。

記者： はい、わかりました。

記者： 先ほど、ホテル200室ということなんですけど、来年度ぐらいには地域が概成するということで、フル稼働して、いろんな施設が稼働していくと、国内外から来る人も多くなって非常に便利だと思うんですけども、これは市長がいいのか、大和ハウスさんがいいのかちょっとわからないんですけども、宿泊施設のキャパシティとしては、今後もっと必要になってくるということなんですか。この地域の稼働状況を考えると、どういうふうに見ていらっしゃるかをお聞かせください。

市長： 殿町のエリアだけで完結するという考え方じゃなくて、先ほどお話ありましたように、対岸のほうにもホテルができるということで、あのエリア全体としての考え方も一方では必要だというふうに思います。ただ、今スタートアップの段階で、先ほど小林社長がおっしゃったように、今の段階での適正の客室というのは200じゃないかなというのがビジネススペースでのお考えということだと思うので、このエリアの人たちを全部ここで抱えようとか、そういう発想ではないというふうにご理解いただいたほうがいいかと思います。

記者： 殿町のエリアでは、ホテルというのはここだけになるということですか。

市長： 殿町の40ヘクタールの中ではそうです。

記者： あと、すみません、レストランとあるんですけども、聞いてみると、殿町はご飯を食べるところがなくて、最終的に7,000人ぐらいの就業人口になってきたときに、どこで食べるのよと。食堂がないとか、いろんなことをおっしゃっていますけど、それに対しては、これは大和ハウスさんが別に責任を負う話ではないし、市が負う話ではないかもしれないんですけど、アメニティの向上ということではどう考えていこうかなと、これは市長のほうがいいですか。もし大和ハウスさんで何か企画がございましたら。

竹林部長： もともとこのA地区というのは、川崎市様から、にぎわいの創出と交流ということテーマでやってほしいというご要望をいただいて、一緒に取り組んでいきましょうということで、私ども民間として参画をしている場所でございます。ですから、かなりヒアリングをさせていただいて、宿泊機能と飲食、コンビニ、こういったものがどうしても必要と、どうしてもつくってほしいというふうなところから、ホテルのご誘致があり、その中での飲食機能のご提供がありと。コンビニエンスストアも、今建築中の施設の中に入ることが決まっておりますし、それ以外のさまざまな利便施設をここで集中をさせる。ここが殿町の研究者の、いろいろな企業の方々が交流できる、また、公園とつなげたのも、普通にオンとオフというふうな形で、そこで気軽に違う企業の方とも交流ができるような場所をつくる。夜は夜で、カフェと最上階のレストランで議論の続きをしていただいてもいいですし、そこでカンファレンスなりアイデアの披露というふうなイベントをやっていただいてもいいよねというふうなコンセプトをつくり込んで、ここを開発していきたいというふうに考えているので、これからそういった機能も充実をさせていくつもりでございます。

記者： ホテルの中にテラスレストランなんかがあるんですけど、それ以外にということですね。

竹林部長： それ以外にです。

記者： 先ほどおっしゃった研究棟5棟、そっちの中にそういう機能も入れていくと。

竹林部長： まず、とりあえず飲食は、まさにその経営が安定して、そこでは入れないというふうになってからつくるべきだろうというふうに思っています。そうでないと、怒られちゃいますので。(笑) せっかく出店していただいたのに、そういったことをしてはいけないということで、コンビニエンスストアだけにつくるということは。

記者： ホテルの中ですか。

竹林部長： ホテルの外です。ですから、飲食はホテルの中だけで今のところはあく予定です。

記者： わかりました。ちなみに、全体ができるのは、A地区はいつなんですか。

竹林部長： 一応、オリンピックまでには全体像は完成をさせて、ミニマムではありますけれども、ここがサイエンスパークというか、そういったものを体現している場所だということを見せたいなというふうに思います。

記者： ありがとうございます。

記者： すいません。地域の交流型ということで、地元の方の期待もすごくあると思

うんですけども、年間を通して大体どのぐらいの人数の方が利用されるというのを見込んでおられるのでしょうか。

小林社長： ホテルの稼働率というような考え方だと思うんですが。

記者： そうですね。

小林社長： 稼働率は80%以上と考えています。

記者： わかりやすい、ぱっとイメージしやすい人数というようなところでの数字というのは出されてはいないですか。

小林社長： そうですね。

記者： はい、わかりました。

記者： すいません。宿泊の予約のとり方といいますか、研究者の方々がメインというところがあるかと思うんですけれども、殿町に入居されている企業と、ある程度長期の宿泊の契約を定期的に結んでしまって、そこで稼働率をアップさせるというか、安定した収益を得るといようなモデルを考えていらっしゃるのか、それとも普通の方がここに予約するよう形がメインなのか。

小林社長： メーンは、ここの施設に来られる技術者とか研究者の方ですから、コーポレート契約のような形でお泊まりいただける場合は、これぐらいの金額でというよう形で、どちらかという、それで基礎の稼働をきっちり固めて、それ以外に空港関連の方とかというよう形で、旅行エージェントというよりは、ネットであるとか、当社の会員になっていただくとか、そういった形で、比較的長期滞在の方が多いと思いますので、そういうよう形を今考えています。

記者： でないと、ここを使いたい研究者の方々が入れないということもあるのかなと。

小林社長： もういっぱい全然だめだというのはなくて、当社の会員になっていただくと、できるだけぎりぎりまで予約できるような枠を置いておいたり、いつも使っている企業さんにはそういう特典をするというよう形で、相互にいい関係にしたいと思います。

記者： そうすると、殿町に進出している企業の特典というよりは、東急ホテルズの会員……。

小林社長： 殿町に進出している企業とできるだけ長期契約のよう形ですということと、それから、当社の会員と一緒にいただければ、それなりの優遇というのはできるようになりますので、直販というんですけど、できるだけそういうチャネ

ルでやりたいなど。旅行エージェントとか、エクスペディアという形よりは、そういうニーズのほうがずっと当社の収支もよくなりますので。

記者： 大体何割ぐらい、そういった形で埋めたいなと思われませんか。

小林社長： まだ特に考えていませんけど、少なくとも今、顕在化している、ここに来られる方のニーズだけで4分の1ぐらいは埋められるんじゃないかと思って。これがいっぱいになれば、願わくば半分ぐらいは埋められて、それ以外にいろんな需要があるのではないかというふうに思っています。

記者： わかりました。

司会： ほかにございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは、本件につきましてはこれで終了といたします。ここで関係者の皆様方が退室されます。ありがとうございました。

(市政一般)

《簡易宿泊所火災事故対策について①》

司会： それでは、お待たせをいたしました。続きまして、市政一般に関する質疑に入らせていただきます。

改めまして、進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

幹事社： きょう午後1時から簡易宿泊所に関する会議が開かれまして、それぞれ資料も頂戴しました。その中で、宿泊所に住んでいる生活保護者の方が半減したり、簡易宿泊所が4分1のぐらい営業をやめるなどして、この2年で状況の変化が数字上見てとられます。市長、この数字、あるいは現地に近々行かれていたとすると、実際に見たり聞いたりしてのご感想やご所見を頂戴したく。

市長： 2年前の火災を教訓にして、それこそ関係局が一堂に会して情報の共有と適切な是正指導ということと、それから転居支援という両輪をしっかりと回してきたという、その結果が数字にあらわれているというふうには思いますが、まだ是正に至っていないところも残されているところございまして、引き続き、さらに厳しい法的措置を含めて指導に当たっていくということをやっていかなければならないというふうに思っています。一定の進捗はあるけども、まだ最終的な解決には至っていないというのが、私の認識でございます。

幹事社： 最近現地に行かれたりしたようなことというのはございますでしょうか。

市長： 2カ月ぐらい前にも行っておりますけども、エリアは少しずつ変わっているというものも自分でも見えていますし、また、経営されている方からもお話を最近聞いて

たこともございますし、市へのさらなる協力をというふうを求める声もございましたので、しっかりこれまでやってきたことに加えて、どうやって新しい町をつくり出していくかという視点も含めて、一緒に取り組んでいきたいというふうに思っています。

幹事社： すみません、少しずつ変わってきているというのは、どういうところが変わったなと思われますか。

市長： 実際に、報道等でもされておりますけども、休業しているというか、事業をやめてしまっているところだとか、あるいはちょうど建てかえていたりという動きがあるところに、少し動きが出てきているなというのは感じます。

幹事社： 課題というのは、どの辺ですか。

市長： 課題というのは、やはり転居支援に向けての取り組みはしていますけども、そもそも転居したくないという強い意思を持っておられる方もいらっしゃるという話も聞いていますし、お一人お一人への対応というのはこれまでもやってきていますが、一人一人の課題というのはみんな別々ですので、そうした丁寧な対応をこれからもやっていかなくちゃいけないなという認識でおります。

幹事社： 幹事社からは以上です。

《憲法改正について》

幹事社： 幹事社です。2問。

ゴールデンウィークに安倍首相が新憲法の2020年の施行を目指すとしたことについての市長の受けとめと、もう1点は、同じく憲法9条の改正について、市長の考えを。

1つ、その前に参考までに、他の都道府県知事の、埼玉の上田知事、議論を進める上でお尻がないと進まない部分がある。期限を切ったことは問題ないが、それまでにやらなければならないかは別問題。弁護士で新潟の米山知事、期限を区切らず議論すべきだ。滋賀の三日月知事、発言を契機に国民の間で議論が深まれば憲法への理解が広がる。9条については、埼玉の上田知事、憲法の条文と実態が乖離しているので自衛隊の存在を明記したほうがいい。同じく新潟の米山知事、自衛隊を従来の枠組みの中で合憲と位置づけることになり、検討してよい意見だ。栃木の福田知事、今回での議論を深めていくべきだという、いろいろ……。

市長： これまでも憲法の話というのは、この場でも何度か聞かれてきたことがありまして、そのたびに申し上げてきているのは、国民の間での憲法に対する議論の盛り上がりというか、深まりというか、そういうものがないといけないんじゃないかなと

いうふうに思います。ですから、国会の議論はしっかりと各政党間で深めていただいて、と同時に、その議論が国民全体に議論として広がって、まさに熟議というか、熟論の中で、そういうようなことにならないと、私たちの憲法ですから、国民一人一人が考えるきっかけにならないといけないし、大いなる議論の結果ということだと思います。それが改正につながるのかどうかというふうなことだと思いますので、そのプロセスが私はとても大事だというふうに思います。ですから、その議論が深まることを大いに期待しているということです。

幹事社： 特に憲法9条については何か。

市長： 総理が9条に明言されたこともあるんですが、決して9条だけの問題じゃないでしょうというふうに僕は思っています。だから、取っかかりというふうな見方はいろいろあるんでしょうけども、憲法だけじゃない、大いなる憲法議論というのは、僕はしたほうが良いというふうに思います。

幹事社： ありがとうございます。い各社、どうぞ。

《簡易宿泊所火災事故対策について②》

記者： 簡易宿泊所の火災に関連して2点お伺いします。今、建築基準法に違反している宿泊所が2年たった今も4件あるという、この現状について受けとめを教えてください。

市長： それぞれについて事情はあるんだというふうには思いますけども、現時点で是正に至っていないというのは、非常に遺憾に思います。

記者： 今後どのような姿勢で取り組んでいくのでしょうか。

市長： これまでも続けてきましたけども、それぞれ根拠のある法律に従って段階を進めていくということです。より強い法的な措置という段階に入ってきているというふうに思いますので、その検討をしていきたいというふうに思っています。

記者： これまでも議論が上がってきた3階以上の使用停止に応じていない宿泊所もあるようですが、それについては今どういう受けとめで、今後どういう対処をとっていききたいなと思っていますか。

市長： 繰り返しになりますけども、根拠法に基づいての指導をより強い形でやっていくという段階に入っているというふうに思いますので、そのように指導していきたいというふうに思います。

記者： あと1点。今も簡易宿泊所に住んでいる、生活保護を受けている方というのは670人ぐらいいらっしゃる。そのうち、高齢化が進んでいるということで、7割

5分以上が65歳という、この現状については、今、市長はどのように受けとめていらっしゃるのでしょうか。

市長： これはちょっと一言ではなかなか言えないというか、言い切ることができないほど難しい問題で、例えば民間のアパートにというふうなことを言っても、対象になっているご高齢の方の意思というふうなものもございますし、それを強制的にというふうなことにはまいりませんので、終の住処ではないんだという形で、いろんな形でサポートしていきたいというふうに思いますが、先ほどの繰り返しになって恐縮ですけれども、一人一人に寄り添う形でサポートしていくしか方法がないのではないかなというふうには思っています。

記者： この火災に関連してなんですけれども、これからどうするのというところで、いろいろリノベーションが進んでいまして、例えば不動産の会社が簡易宿泊所を買い上げて、何か別の業態で宿泊を運営するといった例もこれから出てくると思うんですけれども、日進町の町は宿泊形態が変わる店が出てくるというところについての市長の所感などを教えていただければなと思います。

市長： 川崎市としてリノベーションを促していくという形で進めてきていますので、事業者の理解を得ながら、いいまちづくりの方向性をともに考えていきたいと思いますという手法としてのリノベーションという形でサポートしていますので、いい形には進んできているというふうには思います。

その一方で、簡易宿泊所を今住まいにしている人たちという問題が常にある状況なので、簡易宿泊所がなくなればいいという問題では絶対ないですよ。実際に住まわれている人がいて、適切な住まいをちゃんと誘導できなければ問題は残り続けるわけですから。そういった意味では、簡易宿泊所をなくしてしまえば、また、違う業態にしてしまえば問題が解決するという問題では決してないので、先ほどの転居支援と同じように、いろいろな形で両軸を回していかないと解決しない問題だなというふうには思っています。リノベーションの形は市でもやっていることですし、その動きには歓迎しています。

記者： すいません、あと1点だけいいですか。先ほど不動産関連の会社取材してきました、その会社も、簡易宿泊所をなくすということではなく、町全体で自分の運営するゲストハウス並びに簡易宿泊所全体で盛り上げることが必要だというふうにおっしゃっていたんですね。その中で何か川崎市のまちづくり局など、リノベーションのまちづくりとか、そういった施策もあると思うんですけど、そういうものと連動し

てなにか動けるようなところがあれば教えてください。

市長： この簡易宿泊所の話というのは、これまでもそうですけども、まち局ですとか、健康福祉局だとか、あるいは消防局だという、いろんなところにまたがっている話です。今後、町をどうしていくかというふうな話も、ハードだけの話では全くないので。要するに福祉の話が一緒になってやらないと、この話というのは絶対にうまくいかない話ですので、これはこれからもより連携を密にとってやっていかないとけないなというふうな認識であります。

記者： 簡宿の問題なんですけど、転居支援事業に関してなんですけれども、我々の取材ですと、転居できる人についてはやり尽くしたのではないかと、今後非常に難しくなるといったような話も聞かれました。市長としては、これまで市が進めてきた転居の支援の事業について、今のまま来年度も予算化して続けていきたいとお考えでしょうか。それとも何らか部分的に変えていくべきだとお考えでしょうか。それとも、もう抜本的に見直すべきだとお考えでしょうか。

市長： まず、ここまで転居が進んできたというのは、私は一定の成果が出てきているというふうに思っていて、関係職員はじめ、携わっている人たちの努力に感謝したいというふうに思います。

一方で、ご指摘いただいたように、これからすごく難しい方たちが課題となっていますので、そこはこれまでの手法でいいのか、これからどういうふうな手法がより適切なのかというのは、もう少し検証していきたいというふうに思います。改善すべきことがあれば改善していきたいというふうに思います。

記者： わかりました。

《上下水道局へのサイバー攻撃について》

記者： すみません、ちょっと簡宿とは違う話です。昨日、川崎市の上下水道局のパソコン1台がランサムウイルスに感染をしたということがありました。世界的に非常にサイバー攻撃、影響が出ています。これに対して、川崎市としてどのような対応というものを今後考えられているのかという点と、上下水道局でパソコンがランサムウイルスに感染しているということの事実を把握したのが、きのうの午前8時過ぎぐらいだったというふうに聞いております。実際、報道機関に公表されたのが午後5時半ぐらいだったということでした。これまでのさまざまな問題の公表のスピード感からいって、ちょっと遅かったのかなという気がするんですが、これだけ時間がかかった

というのは、どういう意思決定プロセスでこうしたことになったのかというのを教えていただけますでしょうか。

市長： まず、ランサムウェアのほうから話せば、私も報告を受けたのがたしか5時過ぎていたと。これから投げ込みますよという直前の報告だったので、それこそ8時台に発見したということなので、いろんな対策をとるのに時間がかかったというふうなことはわかりますけども、危機管理上からすれば、情報の伝達、共有が遅かったというふうに思いますし、また、報道機関への情報提供も遅かったというふうに私は認識しております。今後このようなことがないように、また、上下水道局のみならず、全庁的に徹底を図っていきたいというふうに思っています。

記者： ウイルス攻撃に対する……。

市長： ウイルス攻撃に対しては、セキュリティー対策には万全を期してきているというふうには思っていますが、今度、都道府県ごとのセキュリティーシステムに変更がなされて、よりセキュリティーが強いシステムに今度変換しますので、そういった意味では、より脆弱性はカバーできるのではないかとというふうに期待しております。そういうシステム上の問題と、いつも問題になると、人為的なエラーというか、ミスみたいなものから流出したりという話もありますので、そういった認識は常に高め続けていかなくちゃいけないというふうに思います。庁内LAN等々含めて、私も見ていますけれども、そういう意識は日々やっているつもりではありますが、一層取り組みを進めたいというふうには思っています。

記者： ありがとうございます。

司会： ほかはいかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは、以上をもちまして会見を終了させていただきます。ありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355